

3年 図画工作科「カラフルハッピーフレンド」の実践から

山口大学教育学部附属山口小学校 岡崎 典子

1 はじめに

子どもたちは、仲間と共に材料とふれ合う中で、試行錯誤しながら自分のイメージをもっていきます。その際、子どもたちが捉えている形や色、組合せなどの感じを明確にし、子どもたち自身が自分のイメージに気付いていけるようにしたいと思いました。そうすることで、子どもたちは、自分の表し方を見つめながら表現するようになり、自分のイメージを豊かに広げていくことができると考えました。

2 授業の実際

題材名「カラフルハッピーフレンド」第3学年（全6時間）

（1）どんな色の組合せがいいかな [第1次]

第1時では、17色のお花紙の中からお気に入りの色を選んでポリ袋に入れて「試す」場を設定しました。すると、どの色とどの色を組み合わせようか考えて選んでいる子どもがいました。この時間の振り返りでは、自分の選んだお気に入りの色の組合せを「明るい色」「空みみたいなさわやかな色」「緑の仲間」などという言葉でまとめていました。子どもたちは、仲間と共に色の組合せの感じを捉えていたのです。また、子どもたちは、袋にペンで目をかいたり、自分の眼鏡をかけたりに遊んでいました。そこで、「次の時間から、お気に入りの色の紙を入れた袋で、いつも一緒にいると楽しくなる『友だち』をつくろう」と子どもたちに提案しました。

（2）袋を組み合わせ、楽しい「友だち」をつくろう [第2次]

前時に子どもたちが見付けた色の組合せについての気付きを板書に分類・整理しました。それを見ながら色の組合せ方を仲間と比較したり、つなげたりして子どもたちが製作できるようにしました。

また、いろいろな大きさや形の袋の組合せ方について、4種類の袋にお花紙をつめてあるものを使って「試す」場を設定しました。いろいろと試す中で、子どもたちは「小さい袋は手になりそう」「足になるかも」などつぶやいていました。

そこで、何人かの子どもに思い付いた形の組合せを紹介するよう促すと、子どもたちは言葉で伝えたり絵をかいたりして説明しました。それを聞いていた子どもたちは、どのような「友だち」をつくろうとしているのかを想像し、「そうそう!」「かわいい」「○○みたい」「できるかな」と、つぶやいていました。



ある程度の製作の見通しを子どもたちがもてたところで、製作を開始しました。すると、子どもたちは、すぐに材料を選んでつくり始めました。袋に何度もお花紙をつめ直したり、いろいろな形の袋をくっつけたりしている姿が見られました。

第2・3時では、自分の「友だち」に合った飾りを子どもたちは付け加えていきました。次第に子どもたちは、自分の「友だち」に名前を付けて呼ぶようになりました。また、第2次では、毎時間、「形の組合せ、色の組合せで工夫したこと」「自分や仲間の作品を見て感じたこと」を観点に振り返り、交流する場を設定しました。すると、「Nさんが足を付けて『友だち』を立たせていたので、私もしっぽを付けてバランスよく立たせるように工夫しました」と振り返った子どもがいました。このように、子どもたちは、仲間の工夫を取り入れ、自分や仲間の表し方のよさを捉えていたのです。



(3) 「友だち」を紹介し合おう [第3次]

第3次では、自分の「友だち」をどこに連れていきたいか話し合いました。「空を飛ぶように高い所がいいな」というように、自分の「友だち」が喜びそうな場所を子どもたちは選んでいました。そして、周りの景色も含めて自分の「友だち」らしさが伝わるように、子どもたちは写真を撮っていました。その後、図工室で写真をスクリーンに映しながら、全員の「友だち」を鑑賞しました。

Tさんの「雲ベアちゃん」は、ジャングルジムの上で、青空の色と合っていて、とてもきれいでした。(U児)



このように、U児は、T児がなぜその場所で「友だち」の写真を撮ったのかを色や形を手がかりに読み取り、仲間の表し方のよさに気が付いたのです。

3 実践を振り返って

仲間と共に材料とふれ合いながら試行錯誤を繰り返す場を設定することで、子どもたちは、自分のイメージをもっていきました。その際、子どもたちが捉えている形や色、組合せなどの感じを明確にすることにより、子どもたち自身が自分のイメージに気付いていくことができたのです。今後は、一人一人の子どもの思いに寄り添いながら「工夫」を見取って共有化し、さらに子どもたちのイメージを豊かに広げていきたいと思えます。